
桃太伝 鬼が島編

南風原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桃太伝 鬼が島編

【Nコード】

N4124P

【作者名】

南風原

【あらすじ】

桃太伝の続編。桃太たちの戦いから数ヶ月…

第1話『新たな戦い』（前書き）

桃太伝の続編ですので、桃太伝を見てないと内容がわからないと思われる。

できれば、桃太伝をお読みになってからこちらを読んでください。

あらすじ

桃太郎の子孫である桃太が仲間とともに悪の軍団、鬼王軍を倒してから数ヶ月後…

第1話『新たな戦い』

桃太たちの戦いから数ヶ月、鬼王軍の脅威が去って人々は平和に暮らしていた。

桃太も家族とともにのんびり暮らしていると、玄関の戸をたたく音が、

「んっ、誰かきたのかな？」

桃太はそう言つと戸を開ける。

「お、お前は！」

驚く桃太。そこには傷ついた一人の男がいた。それはなんと犬丸だった。

「うっ」

犬丸は桃太を見ると気を失った。

「どうしたんじゃ」

おじいさんが物音を聞いて、そばに近寄る。

「大変じゃ、人が倒れているじゃないか。早く中に運びなさい」

桃太は犬丸を座敷へと運び、布団に寝かせた。

二時間後。

「うつ……うつん」

犬丸が目を覚ます。

「気がついた？」

「お前は桃太。そうか、やっと会えたんだな」
起き上がろうとする犬丸。

「うつうつ」

「まだ寝ていなきゃ」

「早く……早くしなければ」

犬丸は上体を起こした。

「わかったから、おとなしくしている」

桃太は犬丸を落ち着かせる。

「一体何があったんだ？ たしか、あんたは犬山城で……」

桃太が聞くと、

「実は、あの戦いで城から落ちたとき、オレは堀の中に落ちたおかげでなんとか」

命は助かった。そしてその後、オレは傷を癒しながら鬼王城へと向かったのだ。

しかし、オレが城に着いたときはすでに戦いは終わっていた。オレは途方にくれて

山道を歩いていると偶然にも鬼王様と出会ったのだ」

「それで？」

「鬼王様にいきさつを聞き、「ぜひ私もお供させてください」と、お願いして

鬼が島について行った」

「じゃあ、何でここに？」

「それが鬼が島に着いたのはいいが、鬼が島は内乱が起こっていて大変なことに

なっていた。だから、鬼王様と九龍とオレでどうにか抑えようとしたんだがこの

有様で。今は鬼王様一人でなんとかもちこたえていらっしゃるが、それもいつまでもつか……」

「だからそんな怪我をしていたのか」

「そこで同じ一族であるお主に力を貸してもらおうとここまで来たのだ。敵だった

オレが頼める立場でないことも、無理な相談ということもわかってる。しかし、

そこを何とか。頼む、助けてくれ」

犬丸は土下座をして頼む。

桃太は数秒考えたが、

「わかったから頭を上げてよ」

桃太は犬丸の一生懸命の訴えにおされ、詳しく話を聞くことにした。

現在、鬼が島では島から出たい強攻派と今までどおり平和に暮らしたい穏健派に真つ二つに分かれていた。強攻派には戦闘能力が高い、つわものや若者がいて、

まさに武闘集団である。一方、穏健派は年寄りや女、子供が多く、強攻派を止める

ことは出来なかった。そして強攻派は島を出て自分たちの新たな土地を手に入れる

ため戦力を整えていた。とそのとき、鬼王たちが鬼が島へやって来た。鬼王は

自分の体験から強攻派に止めるように説得しようとしたが失敗し、話は平行線を

たどる。そして強攻派と穏健派、初めはお互い話し合いで解決しようとしていたが、

しだいにそれは激化していき戦闘へと発展した。すると穏健派は戦力が低く劣勢に

なった。そこで犬丸は桃太のところへ助けを求めてきたのである。

桃太は真剣な顔で聞いていると、

「わかった。助けに行こう」

桃太は助けに行くことを決めた。

「えっ、本当か？ 恩にきる」

犬丸はまた頭を下げた。

第2話『都へ』（前書き）

桃太伝の続編ですので、桃太伝を見てないと内容がわからないと思われる。

できれば、桃太伝をお読みになってからこちらを読んでください。

あらすじ

桃太郎の子孫である桃太が仲間とともに悪の軍団、鬼王軍を倒してから数ヶ月後…

第2話『都へ』

犬丸の話を聞いた桃太。

「それにしても酷い話だ。穏健派の人たちはただ平和に暮らしたいだけなのに。」

それじゃあ、早く助けに行こう」

桃太は言った。

「それはありがたいが、一人だけじゃ太刀打ちできん。できれば他の仲間にも力を借りたいんだが……」

「わかった、頼みに行こう」

「かたじけない」

「まずはあそこに……」

桃太たちは旅の準備をし、翌日に家を出発することにした。

「また行ってしまうのかい？」

桃太の母が言う。

「ごめんよ、かあさん」

「家のことは心配せんでいい。行ってくるがよい」

祖父が言った。

「気をつけてね」

「じゃあ、行つてきます」

桃太はそう言つと出発する。しばらくして、

「吉備、これから会いに行くという男とは？」

犬丸が聞く。

「そういえば犬丸は知らなかったね。これから会いに行く人は白雉左近さんと

いつて、この前の戦いで出会った都で陰陽師をしている人なんだ」

「そいつは強いのか？」

「もちろん、すごい力を持ってるよ。だから左近さんに会うには都に向かわないと」

まず二人はここから一番近い都に向かつて歩いていった。

一週間後。

「ここが都……」

驚く桃太。だが、それも無理はない。都は巨大で町並みは色鮮や

か、人々も

気品高く、まったく別の世界だ。

「さあ、行こう」

歩みを進める犬丸。しかし、

「止まれ！」

怒鳴る声が。

「なんだ？」

そこには門番がいた。

「お前たちは何者だ」

「いや、ちょっと知り合いに会いに」

桃太が言う。

「それは誰だ？」

「白雉はくちさんです」

桃太は答えた。

「はっは。お前たちみたいなやつが白雉様と知り合いなわけなからう」

門番たちは笑う。

「あやしいやつらめ。ひつとらえよ」

一人の門番がそう言うのと他の門番が近づいてきた。とその時、犬丸は動く。

「うっ」

犬丸は二人の門番に打撃を与え、気絶させた。

「なに？ 手向かうのか。曲者だ、であえ」

門番がそう言うのと、門番たちが攻撃してきた。

「ちょっと待って」

桃太は言うが止まりそうもなく、しかたないので応戦する。

「ぐわっ」

門番は次々に倒れていく。すると、

「なにことですか？」

一人の男が現れた。

「そこにいるのは桃太さんではないですか？」

「あっ、左近さん！」

それは白雉 左近であつた。

第3話『一人目』（前書き）

桃太伝の続編ですので、桃太伝を見てないと内容がわからないと思われます。

できれば、桃太伝をお読みになってからこちらを読んでください。

あらすじ

桃太郎の子孫である桃太が仲間とともに悪の軍団、鬼王軍を倒してから数ヶ月後…

第3話『一人目』

桃太は白雉に会うことができた。

「えっ、白雉様のお知り合いなのですか？」

門番は驚いたようすで尋ねた。

「ええ、鬼王軍との戦いで共に戦った仲間です」

「それは失礼いたしました。どうぞ、お通りください」

門番はそう言うと言道をあける。そして、桃太たちは都の中に入っていく。

「桃太さん、今日はどうしてここに？」

左近が聞く。

「実は……」

桃太は経緯を話した。

「そんなことがあったんですか」

「そうですね。だから、左近さんにも協力してもらおうと思って」

「桃太さんの頼みなら喜んで手伝いますよ。ただ、都をあけるには

帝の許しが必要
があるのです」

「そうですか……」

「まあ、帝に頼んでみましょう。桃太さんも紹介したいですし」

「本当ですか、ありがとうございます」

桃太たちは帝のいる御殿に向かった。そして、御殿の中に入ると
スダレの奥に
人影がある。

「帝様。この者が前にお話した吉備桃太でございます」

左近たちは、ひざまずいて頭を下げている。

「苦しゅうない、おもてを上げ」

帝が言った。

「ははっ」

「そなたが吉備桃太か？ 話は聞いておるぞ。たいした働きだった。
褒美に何が
ほしい？ なんでも言うがよいぞ」

すると、桃太は口を開いた。

「それではお言葉に甘えて」

「うむ。なんじゃ」

「白雉さんを一時貸してください」

「白雉を？」

「はい。実はまた新たな敵が現れまして、どうしても白雉さんの力をお借りしたいのです」

「そうなのか、白雉」

「はい、そのようです」

「うむ、では分かった。行くが良い」

「ははっ、ありがとうございます」

左近たち三人は深く頭を下げた。

こうして左近を仲間にして出発することになった。

町の中を歩く三人。

「では、これから犬山城に向かわれるのですね」

「はい。新之助さんと半蔵さんに会いに行きます」

「ここからだ馬で行けば二日でいけますね」

「じゃあ、行くぞ。一刻も早く鬼が島に行かなければならないのだ」

桃太たちは犬丸にせかされると急いで犬山城へ向かうことに。

三人は都を出発してから夜も休まず走り続けた。そして二日後。

「フゝ、やっとつきましたね」

左近は疲れたようすで言った。

「そういえば、犬丸は城下に入ったら大騒ぎになるんじゃない」

桃太が言う。

「そうだな、入らない方がいいだろう。あいつはあいつの父親とのことで

相当オレを恨んでいるだろうからな」

「うん」

「だから桃太、お願いだ。ヤツを説得してくれ、頼む」

犬丸は頭を下げて頼んだ。

「わかった。できるだけのはやってみるよ」

桃太はそう言うと、左近と二人で城に向かった。

第4話『因縁、再び』（前書き）

桃太伝の続編ですので、桃太伝を見てないと内容がわからないと思われます。

できれば、桃太伝をお読みになってからこちらを読んでください。

あらすじ

桃太郎の子孫である桃太が仲間とともに悪の軍団、鬼王軍を倒してから数ヶ月後…

第4話『因縁、再び』

城の前までやって来た二人。

「ややっ？　そこにいるのは桃太様ではございませんか」

門番の一人が気づいた。

「ど、どうも」

「殿に会いに来たんですね。ささっどうぞ、お入りください」

そう言われると桃太たちは城の中に案内された。そして、天守閣
に行くと、

「いやー、桃太殿、ひさしぶりでござるな」

新之助が一番に出迎えてくれた。

「よっ」

半蔵は寝ころびながらあいさつをする。

「新之助さん、半蔵さん！　本当にお久しぶりです」

四人は再会を喜び合って会話がはずんだ。そして数分間しゃべったとき、

「じゃあ、今夜は盛大にやりましょう」

新之助は宴の準備をさせるために家来を呼ぼうとした。

「い、いや。ちょっとそういうわけには……」

桃太が困った様子で言う。そして、いままでの経緯を話した。

「……」

新之助は黙って聞いていたが、話が終わると重い口を開いた。

「お断り申す」

「新之助さん」

「桃太殿には悪いが、父上を殺した憎き敵に力を貸すなど死んでも
できんでござる」

「でも、そこを……」

「くどい。もう、帰ってください」

新之助はそう言うつと背を向けた。半蔵と左近は黙って二人の話を
聞いていて
口を出す様子はない。

「わかりました。無理なことを言ってすいませんでした」

桃太たちはあきらめて、城をあとにした。

「新之助さんの気持ちを考えると、しかたないですよ。ここは、我々だけでなんとかしましょう」

左近が言った。

そのころ城では、

「おい、いいのか？ いっちまったぜ」

半蔵が新之助に言う。

「……」

新之助は黙っている。

そして、桃太たちは犬丸の所へと戻ってきた。

「どうだった？」

首を振る桃太。

「そうか」

残念がる犬丸。すると、後ろのほうで物音が。

「！」

そこには新之助がいた。

「新之助さん、なんでここに？」

「いや……」

口ごもる新之助の前に犬丸は飛び出し、土下座をする。

「頼む、力を貸してくれ。このオレはどうなってもいい。だから頼む」

「では、斬られても構わないと」

新之助は刀を向けて言った。

「ああ」

犬丸は目をつぶっている。

「いいでござろう。ここは桃太殿に免じて力を貸そう」

「か、かたじけない」

犬丸は深く感謝した。

「めんどくさい男だぜ。初めから協力するために、ここに来たのによ」

そう言いながら、半蔵は現れた。

第5話『鬼が島』（前書き）

桃太伝の続編ですので、桃太伝を見てないと内容がわからないと思われる。

できれば、桃太伝をお読みになってからこちらを読んでください。

あらすじ

桃太郎の子孫である桃太が仲間とともに悪の軍団、鬼王軍を倒してから数ヶ月後…

第5話『鬼が島』

とうとう仲間が集まり、鬼が島に向かうことに、

「ところで、その島はどこにあるのでござるか？」

「ここから、南西の方角にある。まずは、海に出よう」

桃太たちは、浜辺に向かった。

「ここだ」

桃太たちが浜辺に着くと、犬丸は草むらをかき分けはじめた。すると、5人がやっと乗れるぐらいの小さな舟が出てきた。

「これで行くのですか」

左近が尋ねた。

「しかたない。島をぬけてくる時に見つからないように小さい舟で来たからな」

「しかし、これでは…そうだ、わたしの式神で空を飛んでいけば」

「それはだめだ」

「なぜです？」

「鬼が島は結界によって守られていて、入れないんだ。それに、島には見張りがいて派手な行動をとると見つかってまう」

「それでは舟でも行けないんじゃない」

桃太が言う。

「いや、ひとつだけ抜け道があるんだ。鬼王様が両親から聞いたらしい。

だから、オレたちも鬼が島へ行けたんだ」

「じゃあ、行こうぜ」

半蔵がそういうと、5人は舟に乗り込んだ。

そして、舟を漕ぐこと3時間、

「ここで止めてくれ」

犬丸が言うと、舟は海の真ん中で止まった。

「なに？　こんなところで止めてどうするんだ」

「そうですよ。まだ何も見えないですよ」

4人は不思議そうにしている。

「いや、ここでもいいんだ」

そう言つと、犬丸はゆつくりと漕ぎ出した。すると、舟は前方から
どンドン消えていく。

「わあゝ」

桃太は驚き、目をつぶる。しかし、次に目を開けると目の前に島
が現れた。

「!!!」

驚く4人。

「いったいこれは？」

左近が尋ねる。

「結界だ。この結界は島の姿を隠し、なおかつ結界内に入った者の
方向感覚を
乱して島への侵入を防いでいる。それに島の周りには特異な海流が
あり、
より近づけないようになってる。だが、そこには一族の長しか知
らない
抜け道がある。それがこれだ」

舟は小さな浜辺に着く。

桃太たちは舟を降りると犬丸のあとに付いて島の奥へ。

洞窟をぬけ、森をぬけて歩いて行くと村に着いた。

「村長、ただいま帰りました」

犬丸が言つと家の中から老人が出てきた。

「よく来られましたな。ささっ、中へどうぞ」

「どうも、村長をしております族長の明神 鉄斎てつさいと申します。
…実は、頼みたいことが…」

「話は聞いています。僕たちはそのつもりで来たんです」

「ありがとうございます」

村長が頭を下げて感謝していると外が騒がしくなった。

「やつらが来たぞ」

「逃げろ」

村人は逃げまどう。

「じじー。今日こそは結界を解いてもらおうか」

崖の上から声がする。そこには数人の影が。

第6話『激突』（前書き）

桃太伝の続編ですので、桃太伝を見てないと内容がわからないと思われる。

できれば、桃太伝をお読みになってからこちらを読んでください。

あらすじ

桃太郎の子孫である桃太が仲間とともに悪の軍団、鬼王軍を倒してから数ヶ月後…

第6話『激突』

桃太たちは声を聞いて外に出た。

「じじー。今日は結界を解いて貰えるんだろうな」

崖の上の男が言う。

「ならん。貴様らを外に出せば、また大きな争いになる。それだけは防がねば」

「外に出られないんですか」

桃太が聞いた。

「この島が結界に守られているのは知っているだろう。それは外からの侵入を防ぐだけでなく、中からの出港をもはばんでいるのだ」

声の方を見ると、

「お、おまえは鬼王」

そこには鬼王と九龍がいた。

「おつ、見かけねえ顔がいるなあ。また、じじい共が助っ人を連れて来たか」

男の一人が桃太たちを見つけて言う。

「フン。どんな奴を連れてこようが無駄だ」

「おお、ずいぶん余裕だな。オレが相手になってやる。かかってこいよ」

半蔵は前に出て言った。

「馬鹿なやつだ」

男たちのリーダーらしき人物が言う。

「よう。俺にやらせてくれよ」

「かまわん」

「へへっ、いつちょ遊んでくるか」

そう言うで大柄の男は崖から飛び降りた。

「遊びになるといいがな」

半蔵も言い返す。

二人は、かまえると同時に飛びかかっていった。

お互いパンチを繰り出した次の瞬間、半蔵は顔面を殴られ後ろに吹き飛んだ。

「半蔵さん！」

「半蔵殿！」

桃太と新之助は吹き飛ばされた半蔵を見て、すぐ敵を見返すとそこにはさっきの男はいない。

「後ろです」

左近が言う。

男は素早い動きで二人の後ろに移動して、桃太と新之助を左右に薙ぎ払った。

二人は気づくのが遅く男の拳により左右に吹き飛んだ。

『火炎弾』

左近の術が男の背中に直撃した。大きい爆発とともに煙が立ち昇る。

煙がおさまると、男が立っていた。

「脅かしやがって。ビックリしたじゃねえか」

男は無傷だ。

「！」

左近が驚いていると、男は頭から飛んできた。そして、そのまま左近の腹に

頭突きが入る。

「うっ」

桃太たち4人は大きなダメージを受けて立てない。

「もう終わりか。お前の言うとおり遊びにもならなかったな」

男が言う。

「じじい、どうする？ もう助っ人はいないぞ。まだやるか」

リーダーの男が言った。だが族長は黙っている。

「そうか、しかたない。やれ」

その号令とともに十数人の男たちが現れ、襲ってきた。

「ま、待ってくれ」

男たちは止まる。

「やっと結界を解く気になったか。では解いて貰おうか」

「いいだろう。しかし、条件がある」

「条件？」

「さよう。一ヶ月後、我々と勝負をして勝ったら結界を解いてやる」

「いいだろう。で、どんな勝負だ」

「七対七の勝負で四勝した方が勝ちとするのはどうじゃ」

「わかった。では、楽しみにしてるぞ」

そう言うと、男たちは消えて行った。

第7話『修行開始』（前書き）

桃太伝の続編ですので、桃太伝を見てないと内容がわからないと思われる。

できれば、桃太伝をお読みになってからこちらを読んでください。

あらすじ

桃太郎の子孫である桃太が仲間とともに悪の軍団、鬼王軍を倒してから数ヶ月後…

第7話『修行開始』

村長の家の中。

「これからどうするでござるか？」

「七対七の対決をするって言ってましたが、七人って、」

村長は黙って桃太を見つめる。

「もしかして僕たちですか？ でも、さっき全然相手にもならなかった

じゃないですか」

「いや、方法はある」

村長が言った。

「えっ、それは？」

「修行じゃ」

「そんな。一か月でなんて」

「いいや。可能じゃ。お主はまだ己の力を十分に使いこなせていないだけじゃ。

それに他の者にも明神一族と同じ力をつけてもらっ。」

「同じ力？ それって桃太殿たちだけが使える力じゃないんでござるか？」

新之助が聞いた。

「お主たちも知っておると思うが、明神一族は特殊な力が使える。火を操ったり、水を操ったり。しかし、それは別に特別なことではない。人間は皆その能力を持つているのだ。例えば剣士の斬撃や術者の火の弾もその一部だ。」

「それじゃあ……」

「うむ。その力を使いこなせるようになれば、あやつらにも負けんであろう」

「よっしゃ。さっさとやろうぜ」

半蔵は燃えている。

「そう急ぐな、修行には準備が必要じゃ」

村長が言つと次に鬼王が口を開く。

「オレたちは別で修行させてもらつ」

そう言つと鬼王、九龍、犬丸は出て行つた。

「いいんですか？」

桃太が聞いた。

「大丈夫じゃ。あやつはすでにわし等の修行を終えておる」

村長がそう言うのと、一人の老婆が入って来た。

「オババ様」

「オババ様？」

「オババ様は巫女で人の属性を調べることができるのじゃ。その属性によって

使える能力は違う。まずは、それを調べてから修行じゃ」

その結果、半蔵は金、左近は木、新之助は風、桃太はもちろん光の属性である。

次の日。桃太たちは別々の所に呼ばれた。

「オセーな。ここに来ていつていたくせに」

半蔵は岩場で待っている。とそこへ、

「おまえが半蔵か？」

10歳くらいの男の子が立っていた。

「なんだ子供か。修行の邪魔だ、あっち行け」

「なんだと。先生に向かって」

「先生だと。冗談はよせ」

「ムキー。もう怒ったぞ。これでもくらえ」

そう言つと男の子は飛びかかって来た。

『必殺 飛び蹴り』

半蔵はひらりとかわす。

男の子の蹴りは外れ、地面に当たるが、蹴りは地面を大きくえぐり、
陥没する。

「！」

驚く半蔵。

「フツ、ただのガキじゃなさそうだ」

左近のところには老人がいた。

「あなたが修行をつけていただけの方ですね」

「ホッホッホッホ」

新之助は川にいた。相手は若い女性であった。

桃太はというと。

「村長、あなたが直々に教えてくれるとは」

「光の力を持ったお主に教えられるのはワシしかおらんからな」

第8話『それぞれの修行』（前書き）

桃太伝の続編ですので、桃太伝を見てないと内容がわからないと思われる。

できれば、桃太伝をお読みになってからこちらを読んでください。

あらすじ

桃太郎の子孫である桃太が仲間とともに悪の軍団、鬼王軍を倒してから数ヶ月後…

第8話『それぞれの修行』

「まず、何をするんだ？」

半蔵が聞く。

「うーん」

「うーん、じゃねえだろ。何しに来たんだよ」

「うるせえ。オレはただ組み手をして来いって言われただけだい」

「体で覚えろってことか。よし、来い」

「えへへ、ほんじゃ、いくぞ」

そう言つと男の子は攻撃してきた。その攻撃は一発一発が重い。

半蔵も反撃するがパワーもスピードも相手の方が上なため苦戦している。

「オレの攻撃が効かねえ。逆に攻撃したオレの拳がしびれる。なんて硬さしてんだ。？！　そうか。あれはオレの『鉄』と同じだ」

気づいた半蔵は、『鉄』くろがねを使った。

「ハアアアア」

半蔵の体が鉄のように硬くなる。

『必殺 殴る』

すると、男の子が攻撃してきた。

半蔵は顔にパンチを受ける。体全体を鋼鉄の硬さにした半蔵だったが、パンチを受けた顔はゆがみ、全然効果がなくふき飛ばされた。

「ペッ」

口から血を吐く。ダメージを受けている。

「くそ。まだまだか。しかし、これを使いこなせれば」

半蔵が言った。

一方、左近の方かというと座禅をして目をつぶり集中していた。

「そうじゃ。自然の力を体で感じるんじゃ」

左近の体の周りには熱気のようなものが見える。

「っはあはあ」

集中を解いた左近は疲れていた。

「まあいいじやろ。だいぶ自然の力を取り込めるようになった。次の段階に入るとしよう」

「はい」

「お主は術者だったの。何か術を出してみい」

そう言われると左近は術を放った。

『火炎弾』

「よし、今度は自分に取り込んだ自然の力を術に込めるんじや。

さつきも言ったが木の属性は、樹木が大地や空気から養分を吸収するように

周りのものから自然の力を取り込む能力がある。そして、その取り込んだ

自然の力を放つことで強力な攻撃をすることができるとんじや。」

「しかし、どうやって」

「体に溜めた自然の力を術、一点に集めるんじや。それだけを考える」

「はい」

左近は集中した。

『火炎弾』

その放った火の弾は数倍の大きさだ。しかし、途中で消滅してし

まった。

「くっ、失敗か」

「ホッホッホ。いい線いっとったぞ」

別の場所、新之助は若い女性と戦っていた。

「それで終わりですか」

女性が言う。

「まだまだ」

新之助はそう言うと言技を出した。

『かまいたち』

刀から、一つの斬撃が飛ぶ。

女性は、それを扇子の風で軽くあしらった。斬撃は消える。

「それが『かまいたち』ですか？ わたしが本当の『かまいたち』を
教えて差し上げましょう」

女性は軽く扇子をあおいだ。すると、無数の斬撃のようなものが
飛んできた。新之助はその無数の斬撃によって、全身が刃物で切ら
れた
ように切れている。

「あなたの斬撃は、ただの気を使った斬撃です。しかし、風の気を
使えば

このように威力も切れ味も上がります」

女性はまだ汗ひとつ、かいていない。

「さあ、あなたの全てを見せてください」

そう言われると新之助は相手に向かっていく。

第9話『決戦の日』（前書き）

桃太伝の続編ですので、桃太伝を見てないと内容がわからないと思われる。

できれば、桃太伝をお読みになってからこちらを読んでください。

あらすじ

桃太郎の子孫である桃太が仲間とともに悪の軍団、鬼王軍を倒してから数ヶ月後…

第9話『決戦の日』

桃太の修行場所では、

「お主はまだ、光の力を解放しきれていない。まずはその力を引き出そう」

村長が言った。

属性の力とは、体内の中心にある気の源のさらに奥にあるものである。

それはロックされており、通常の間人は一生開くことなく死んでゆく。

しかし、明神一族はそれを開き、特殊な力を使っている。

「今までは、閉じていた所から溢れ出した属性の力を使っていたが、これを開ければ数段に力が増すじゃろ」

村長はそう言うとき桃太の みぞおち のあたりに手をあてた。
すると、その手がぼんやりと光だした。

「これでいいじゃろ」

「今何を？」

「わしの火の属性をお主の体に流し込んだ。属性は違うが、お主が属性の

扉を開くきっかけを与えたんじゃ。試しに解放してみよ」

桃太は集中し始めた。

「！　すごい、力が溢れてくるようだ」

こうして、桃太たち4人は決戦に向け修行を続けていった。

修行をはじめて2週間たったある日、桃太たちは集められた。

「修行は終わりじゃ」

村長は桃太たちに言う。

「だが、もう一つやらねばなんことがある。それは武器じゃ」

「武器？」

「そうじゃ。武器を強化するんじゃ」

「オレは武器なんかないぜ」

半蔵は言った。

「武器でなくとも服でも強化できる。どうするかと言うと自分の属性の力を込めるんじゃ」

「拙者たちが作るんでござるか？」

「うむ。自分の属性の力で作った武器は自分と一体化し、

より自分の力を発揮できる。また、服などは防御力が上がるんじゃない。お主たちも見たいじゃろ。敵の一人は火の弾を受けても、怪我がなかっただけでなく、服にもキズひとつついていなかった」

「なるほど」

その後、桃太たちは作業を始める。刀は打ち直し、服は新たに作った。

その作業に5日を費やし、残りを個人の修行にあてた。

そして、決戦の日がやって来た。

「腕が鳴るぜ」

「絶対勝ちましょう」

桃太たちは装いも新たに、対決の場所へと着いた。すると、

「よう」

犬丸たち3人が現れた。

「フン、修行やってたんだろうな」

半蔵は冗談めいた口調で言った。

「鬼王様と我ら二人でかたずけてやる。お前らの出番はないと思うぜ」

犬丸が言う。

とその時、気配を感じた。

「！」

岩場の上に七人の男たちがいる。

「逃げ出さずによく来たな」

リーダーが言った。

「返り討ちにしてやるぜ」

半蔵が言い返した。

「それじゃあ、はじめるとするか」

リーダーが言うと1人の男が降りてきた。

「俺から行くぜ」

その男は半蔵たちが一か月前に戦って負けた男だった。

「！こいつはオレにやらせてくれ」

半蔵はそう言つと前に出た。

「すぐに終わらせてやる」

「この前のようにはいかないぜ」

いよいよ、決戦の火ぶたが切られようとしていた。

第10話『一回戦』（前書き）

桃太伝の続編ですので、桃太伝を見てないと内容がわからないと思われる。

できれば、桃太伝をお読みになってからこちらを読んでください。

あらすじ

桃太郎の子孫である桃太が仲間とともに悪の軍団、鬼王軍を倒してから数ヶ月後…

第10話『一回戦』

一回戦目が始まる時、村長が言う。

「勝敗はどちらかが負けを認めた時、または戦闘不能とみなされた時じゃ。
いいな」

かまえる二人。先に動いたのは男の方。
男は飛びこんでいき、思いつきり殴る。

「！」

半蔵はそのパンチを腕で防いでいた。

男は後ろに下がる。

「腕を上げたようだな。お前、名は何という」

「橘 半蔵」

そして、男も名乗る。

「俺の名は明神 六。^{ろく}いくぞ、橘 半蔵」

そう言うと六は攻撃する。半蔵も反撃するがお互い一步も引かず、
激しい攻防をくりひろげ、クリーンヒットはない。

いったん、間合いを取る二人。

「どうだ」

「では、次はついてこられるかな」

六は目にも止まらぬ速さで移動した。半蔵もその速さについていく。

二人とも大柄の男とは思えない動きだ。そして、今度はがっちり手を組み合い、力くらべをする。

「くっ」

「おりゃ」

半蔵は六を振り回し、投げ飛ばした。六は岩場に突っ込む。

「ここまでやるとはな」

六はガレキの中から立ち上がる。

「はああああ」

六は気合の入れると周りの岩のガレキが宙に浮いた。

『いわてけん
岩手拳』

そう言つと、その岩が六の手にくつつき、巨大なボクシンググローブ

のようになる。六の属性は土だった。

六はその手をハンマーのように振りおろし攻撃してくる。

半蔵はかわし続けた。

『岩手拳 本羽有』
（いんぱう）

六の手のグローブだけがロケットのように飛んできた。

「ぐっ」

それは半蔵に当たり、ふっ飛んだ。半蔵の口からは血が出ている。

六の手には岩のグローブがまた出来ていた。

「どりゃ」

六は殴りかかってくる。それは、半蔵に直撃したかのように見えた。

しかし、次の瞬間、岩のグローブは砕ける。

「なに？」

半蔵は岩のグローブにパンチしていた。腕をよく見ると黒光りしている。半蔵の腕は鉄と化していたのだ。

「もういっちょ」

六は反対の手で攻撃した。

「！」

またも岩のグローブが砕ける。半蔵も両腕を鉄にしていた。今度は半蔵が攻撃。両手でパンチする。

六は腹にパンチを受け後ろにふき飛んだが、なんとか倒れず踏ん張った。

「うおお」

六は、また気合をタメはじめた。

『岩手拳 完全武装』

そう言つと、今度は全身に岩をまとった。

「どりゃ」

六は突っ込んできた。

半蔵はかまえる。

「オレの進化した技を見せてやる。『喧嘩殺法 鋼地獄突き』」

はがね

半蔵のパンチが六の腹に突き刺さる。その衝撃で岩の鎧は、背中の部分まで壊れた。

「カハッ」

次に半蔵は手を組み、その手を上から下へ叩きつけた。それは六の頭に当たり、岩の兜が粉々になる。

大きなダメージを与えたようだ。

「ぐおおおお」

地面にめり込んだ六はすさまじい気を放った。

半蔵は後ろに引いた。

「くそ、くそ、くそ、頭に來たぜ。こうなったら…」

そう言つと、六は技を出す。

『岩石巨人 呂歩^{ロホ}』

すると、六は盛り上がってきた地面に飲み込まれる。
その土の塊はどんどん大きくなり人の形になっていった。
それは、全長30mの巨大な土人形で、六は胸の中にいる。

「なんだこれは？」

驚く半蔵。

第11話『二回戦』（前書き）

桃太伝の続編ですので、桃太伝を見てないと内容がわからないと思われる。

できれば、桃太伝をお読みになってからこちらを読んでください。

あらずじ

桃太郎の子孫である桃太が仲間とともに悪の軍団、鬼王軍を倒してから数ヶ月後…

第11話『二回戦』

動き出す巨大な土人形。

「グガー」

巨人は半蔵を踏みつけた。

ジャンプして避ける半蔵。しかし、巨人の払った手に弾かれた。半蔵は崖にめり込む。

巨人は、そんな半蔵に追い打ちをかけた。

半蔵は何回も殴られ、大ダメージを受けるが、立ち上がる。

「グガー」

殴りかかる巨人。半蔵もそのコブシにパンチを繰り出す。

「喧嘩殺法『鋼地獄突き』」

しかし、巨人には効かず、半蔵は潰された。

「もう終わりにしよう」

六は巨人の胸から上半身を出して言った。

「望むところだ」

半蔵はボロボロになりながらも立ちあがる。

「ハアアアア」

気を高める半蔵。

「喧嘩殺法 『はがね鋼』」

半蔵の体全体が黒光りし、鉄のようになった。

「グガー」

巨人は渾身のパンチをする。

「うおおおお」

半蔵は、力いっぱいジャンプし、コブシを突き上げた。
そして、半蔵のパンチは巨人の攻撃してきた腕を破壊しながら
飛んでいき、巨人の胸にいる六にまで届く。

「ぐおおお」

巨人は大きな光を放ち、消滅していった。

二人は地面に倒れている。

「ハア、ハア」

立ち上がろうとする二人だがお互い体力がなく、再度倒れた。

「この勝負、引き分けじゃ」

長老が言った。

両陣、仲間をかつぎ戻ると、

「次はおれっちだぜ」

男が降りてくる。

「ここはオレが」

犬丸が申し出た。

「オレは犬丸」

「おれっちは明神 伝ノ介^{でんすけ}」

「いざ勝負」

犬丸はそう言つと構えた。

「第二回戦目、はじめ！」

村長が言つと、伝ノ介は消えた。

「！」

伝ノ介はすごい速さで犬丸の後方の頭上に移動し、攻撃してきた。

犬丸は気づいてよける。

伝ノ介の武器は地面に突き刺さった。伝ノ介の武器は長い鉄のこん棒だ。

「！」

犬丸は攻撃をよけたものの、何か痛みが走る。

伝ノ介はさらに攻撃するが犬丸は、かわし続けた。しかし、そのたびに痛みが犬丸を襲う。

「一体何なんだ」

不思議がる犬丸だったが反撃を開始した。

「強くなったオレの力を見せてやる。『瀑布^{ばくふ}』」

犬丸の刀から滝のようにすごい勢いで水が一直線に飛んでゆく。伝ノ介はこん棒を回転させ、防ぐ。お互いに譲らず我慢比べのようすだった。

「うっ」

今度は、先ほどより強い痛みが。

「おれっちの属性は雷だぴょん」

伝ノ介のこん棒には電気が通っていて、攻撃そのものをよけてもこん棒からの放電によりダメージを与える。また、水は電気を通しやすく

するため、防いだこん棒からの電気が水の攻撃を通して犬丸に流れ込んだ。

水の属性である犬丸にとって最悪の相性である。

「ちっ」

犬丸は別の技を出す。今度は水属性の飛ぶ斬撃だ。しかし、相手も斬撃を飛ばしてきて相殺される。

犬丸は負けじと連発するが結果は同じ。

「お前の攻撃はそんなものか。もっと強い雷の力はないのか」

犬丸は言う。

「あるぞ」

伝ノ介は技を出す。

『電でん 雷砲らいほう』

大きな電気の塊が飛んできた。

「かかったな」

犬丸はそう言うと水の斬撃を飛ばす。二人の技同士がぶつかると、

電気の塊は地面へと消えた。よく見ると地面は水浸しで、その水は伝ノ介の足元につながっていた。

犬丸は先ほど、むやみやたらに攻撃していたわけではなかった。伝ノ介の足元に水たまりを作るためにやったのだ。そして、作戦はうまくいった。電気の塊は水を伝わって伝ノ介を襲う。

第12話『三回戦』（前書き）

桃太伝の続編ですので、桃太伝を見てないと内容がわからないと思われる。

できれば、桃太伝をお読みになってからこちらを読んでください。

あらすじ

桃太郎の子孫である桃太が仲間とともに悪の軍団、鬼王軍を倒してから数ヶ月後…

第12話『三回戦』

「？」

伝ノ介は無傷だった。

「策を練っていたようだけど、おれっち自身が雷属性なんだから自分の技をくらっても平気だぜい」

余裕の伝ノ介。

「今度はこっちの番だ」

伝ノ介は水たまりにこん棒を叩きつけた。その勢いで水しぶきが犬丸に飛んでゆく。

犬丸は腕で顔を隠し、ぬれないようにしたが、全身が痺れた。その水しぶきには電気が帯びていた。

犬丸が一瞬、動きを止めた時、伝ノ介はこん棒で腹を横殴りにした。

「しまった」

犬丸はふき飛ぶ。

「トドメだ」

伝ノ介は高くジャンプしてこん棒を投げつけた。

犬丸は、なんとか避ける。そして、伝ノ介が武器を手放したことでチャンスと見た犬丸は反撃しようとした。

ところが伝ノ介は次の攻撃に入った。

『サンダー
残堕』

そう言つと大きな雷が地面に刺さつたこん棒に落ちる。

犬丸は黒こげになった。

「一勝いただき」

伝ノ介はこん棒に取りに犬丸の横まで来た。すると、倒れた犬丸は伝ノ介の足をつかむ。

「!？」

「へへッ、タダじゃ負けない。お前も道連れだ」

犬丸は最後に奥の手を出す。

『みず
水爆破』

そう言つと、犬丸の周りは水蒸気爆発した。

その水蒸気が消えると二人はやけどを負って倒れている。

「犬丸！」

叫ぶ鬼王。

「またしても引き分けか」

相手リーダーが言った。

二人はやけどを負っているため救護班の村人が治療のため運んでゆく。どうやら命に問題はなさそうだ。

次に第三回戦目。

「わたくしの名は白雉 左近」

「オレは明神 水無^{すいむ}だ」

「それではいいな？ 始め」

村長の掛け声とともに始まる。

まずは水無から攻撃した。水無の武器は2丁拳銃で、拳銃からは水の弾が発射される。

「！」

左近は避けた。そして、後ろを見ると岩には穴が開いている。

水無は連射した。

『土防壁』

左近は土の壁を作って防ごうとしたが、壁は八チの巣になる。
左近は壁の後ろから逃げ、

『土防壁』

今度は三重の壁を作る。

「無駄だ」

水無は連射した。三重の壁は少しずつ削れていく。そして、
とうとう粉々になった。

左近はというと、目をつぶって集中していた。

しかし、水無の水の弾は当たっていない。左近を見ると周りに球体の
バリアのような膜^{まく}が張っている。それが攻撃を防いでいた。

「あれは」

桃太が言った。

「あれは自然の力を吸収しておるんじゃ」

見物に来ていた、左近に修行をつけたお爺さんが言う。

「自然の力は、ただ樹木や大地から力を吸収するだけでなく
相手の属性の力をも吸収できるんじゃ」

そう、左近の周りにあるのは相手の攻撃を防いでいたのではなく、
吸収していたのだ。

「！」

左近は目を開き、扇子を持った手を前へ出す。

『てんちらいどう
天地来同』

扇子の先にエネルギーの塊ができ、そこからエネルギー波が出た。

水無は銃を連射したが、エネルギー波に飲み込まれていく。

「うあああ」

水無は直撃を受け、戦闘不能に。

「そこまで、勝者 白雉 左近」

村長が言う。

第13話『四回戦』（前書き）

桃太伝の続編ですので、桃太伝を見てないと内容がわからないと思われます。

できれば、桃太伝をお読みになってからこちらを読んでください。

あらすじ

桃太郎の子孫である桃太が仲間とともに悪の軍団、鬼王軍を倒してから数ヶ月後…

第13話『四回戦』

四回戦目。鬼王が出る。

「お前も明神一族だったな。だが、なぜそちら側にいる。外界に興味はないのか？」

対戦相手が言う。

「ない」

「そうだった。お前は外界から逃げ帰って来たんだったな」

「貴様らに何がわかる」

「弱い者のことなどオレにはわからん」

「弱いかどうかその身で味わうがよい」

そう言つと戦いが始まる。

まずは、普通に刀で戦う。お互い、つばぜり合いを繰り返す。

「先の戦いでお前の力は知っている」

『地獄の業火^{じごくか}』

鬼王は火の玉の技を出す。

「フン」

男は腕で、はじき飛ばした。

鬼王はその隙に男に詰め寄り、突きをくり出す。

男は突きをかわし、鬼王の腕を取ると、

「あんな技誰でもできるわ」

そう言つと男は鬼王より大きな火の玉を近距離から放つた。

男も火属性だ。

鬼王は、なんとか防いだ。

「おれの新たな力を見せてやるぜ。ハアアアア」

鬼王の刀から火が出たと思ったら、その火は黒い色に変わっていく。

「これが、おれの新しい力だ」

鬼王が黒い火の斬撃を飛ばす。男も火の斬撃を飛ばすが火力が違いすぎる。

そして、黒い火の斬撃は男に直撃した。

「くっ」

男は防いだ、服の袖が焼けて無くなった。

「どうだ」

「少しはやるようだ。名を聞いておこうか」

「明神 花山^{かざん}」

鬼王は、本当の名を言った。

「オレの名は明神 烈公^{れっこう}。今度はオレの力を見るがよい」

烈公は気合を入れると、服が燃えて鎧の形に変わっていく。

それが終わると、烈公は刀を振る。すると、斬撃が飛ぶ。

花山も斬撃で応戦するが相殺された。

「黒い火なんて見たことない」

桃太が言っと。

「あれは、花山が修行で生み出したものだ」

村長が語る。

「属性はいくつかあるが、例え同じ属性のものでも、まったく同じということはない。人それぞれ違うんじや。花山の場合、つらい過去の出来事や人間への憎しみ、怒りなどが、あのような黒い炎を生み出したんじや」

花山は技を出した。

「なら、これならどうだ。『こくえんりゅうざんげき黒炎龍斬撃』」

それは黒い龍の形をしたものだ。

烈公は刀を振り下ろすと、龍は真つ二つになり、花山にも切り傷が。

「火属性、最強はこのオレだ」

烈公は宙に浮くと刀を振りかぶった。すると、刀と鎧が炎に包まれた。

刀はどんどん大きくなり、数十mとなった。

「うおおお」

烈公は巨大な刀を振り下ろす。

（このままでは皆が危ない）

そう思った花山は受け止めた。だが、刀は重たいため足が地面にめり込む。

「ぐううう」

耐える花山。

「負けるものかー」

花山は序々に押し返し、

『こくえん マグマ
黒炎魔久魔』

大技を繰り出した。

烈公は地面から噴き出る黒い炎に包まれる。烈公は戦闘不能となった。

「これで二勝。王手でござる」

「やったー」

喜ぶ桃太たちであつたが、

「何が黒炎だ。つらい過去？ 憎しみ？ 笑わせるな」

相手リーダーが言った。

第14話『五、六回戦』（前書き）

桃太伝の続編ですので、桃太伝を見てないと内容がわからないと思われる。

できれば、桃太伝をお読みになってからこちらを読んでください。

あらずじ

桃太郎の子孫である桃太が仲間とともに悪の軍団、鬼王軍を倒してから数ヶ月後…

第14話『五、六回戦』

「俺の力の前では全てが無だ。お前のその辛い過去など、幻想にすぎなかったということを教えてやる」

相手リーダーは手を花山に向けると、花山の足元から黒い影が出て来て、

花山を覆う。そして、黒い影が無くなったと思ったら花山は気を失い倒れた。

「鬼王様！」

九龍が叫ぶ。

「貴様、鬼王様に何をした」

「俺の力で本当の苦しみを見せてやっただけだ」

「うおおお」

九龍は飛び出す。

相手側の男が迎え撃とうと刀に手をかけたが、リーダーが制止した。

「お前にも見せてやろっ」

リーダーはそう言うとき、技を出した。

「なんだ？」

九龍は闇に包まれた。

「これは一体」

その中は真っ暗で何も見えず、とても寒い。しかし、何も起こらない。

九龍はいろんなことをするが変化はない。それから数時間たつとどんどん不安になり、やがて恐怖が襲ってきた。それが何日も続き、九龍は錯乱する。そして、とうとう九龍は自害した。

九龍の周りの黒い影は消える。九龍は倒れた。

「九龍！」

桃太たちは何が起こったかは知らない。なぜなら桃太たちには一瞬の出来事だったからだ。

九龍は数秒の出来事を何十日もの時間に感じていた。自害も本当にした

のではなく、頭の中での想像だったがショックで気を失った。

「これでようやく一勝だ。さあ、次の相手は誰だ」

「えっ」

「なんだ、別に誰が何度戦おうがかまわないだろう。なあ、じじい」

「う、うむ」

「だそうだ」

「ここは拙者が」

新之助が出る。

「拙者は山吹 新之助。お主の名は」

「明神 影虎^{かげとら}だ」

名乗りを終えると、村長が言う。

「では第六回戦目、始め」

「いざ、尋常に勝負」

新之助は構える。

「いつでもいいぞ」

影虎は仁王立ちしている。

新之助は切りつけた。が、影虎が刀の刃をつかみ止めた。手は切れていないし、新之助も動けない。

「くっ」

影虎は新之助の顔を殴り、新之助は後ずさりした。

「かはっ」

ダメージを受けるも諦めずに四方から攻撃した。しかし、
全て防がれる。

『山吹流奥義 一刀両断』

新之助は刀を振り下ろした。影虎は刀で受ける。新之助の技の衝
撃は

影虎の後ろの地面を真っ二つにするほどだ。

「やっと、刀を抜いたでござるな」

一旦、間合いを取る新之助。

「フツ、後悔させてやる」

そう言う影虎の刀は黒い。

「黒い刀。鬼王と同じ？」

桃太が言った。

「いや、あやつの属性は闇だ」

村長が言う。

「闇の力はお主の光の力と同じ、百年に一人の逸材なのじゃ」

第15話『七回戦』（前書き）

桃太伝の続編ですので、桃太伝を見てないと内容がわからないと思われます。

できれば、桃太伝をお読みになってからこちらを読んでください。

第15話『七回戦』

影虎は黒い斬撃を放った。その斬撃は新之助に当たり、土煙が上がる。

新之助は、なんとか防ぎ反撃した。目にも止まらぬ速さで影虎の後ろに回り込み刀をふり下ろす。

しかし、影虎は後ろを振り向かずに刀で受けた。

「！」

新之助は負けじと技を出す。

『山吹流奥義 桜吹雪』

すごい速さで何度も切りつけるが、それも全部防がれた。

「はあ、はあ」

新之助は疲れている。

今度は、影虎が斬撃を放ってきた。新之助はなんとか避け続けている。

「はあ、はあ」

二人は交互に技を出す。

『山吹流奥義 かまいたち 乱』

無数の斬撃が飛ぶが、影虎の一振りの飛ぶ斬撃で相殺された。

「はあ、はあ」

新之助は岩の陰に隠れた。

すると、新之助の腹から刀が飛び出る。

それは影虎の刀だ。だが、影虎は遠くにいる。

どうやら影虎の技のようだ。

「うつ」

血を吐く重症の新之助。

（強すぎる。勝てそうにないでござる。しかし、桃太殿のためにも少しでも相手の体力を奪わなければ）

新之助はそう思うと影虎の前に出る。

『山吹流奥義 かまいたち 一刀』^{いっとう}

一つの大きな斬撃が飛ぶ。

影虎は刀で切ると斬撃は真つ二つになり、後方へ飛んでいく。
後ろの岩がきれいに切れた。

「くっ」

新之助は前のめりに倒れた。

「新之助さん」

駆け寄る桃太。

「すまないでござる。相手の本気も出させることもできず、ぐふっ」

「もう、話さないください。誰か早く手当てを」

救護班の村人が運んでゆく。

「次の戦いで全てが決まる」

影虎が言った。

「影虎。負けたときはわかってるじゃろうな」

村長が言う。

「もちろん、約束は守る」

「では、いくぞ。はじめ！」

村長の掛け声で桃太はかまえる。向かい合う二人。
まず、桃太が動く。

影虎は桃太の一撃を難無く刀で受けた。
桃太は続けて攻撃する。

「活人剣奥義 『金剛撃』」

金剛撃は相手の武器や防具に衝撃を与えることで振動をおこし、その振動で相手の体の自由を奪う。

桃太は初めからパワー全開だ。

「！」

影虎の刀で防いだ手が痺れる。
影虎はそれでも反撃した。

桃太はヒラリとかわすと面を打つ。
影虎は腕で防ぐ。そして、後退した。腕は痺れている。

「目ざわりだ」

そう言うとき影虎は九龍と花山に使った影を使う。

「！」

桃太は闇に包まれた。しかし、次の瞬間、影の塊から光が漏れてきた。そして、光によって影が消え、桃太が現れた。
桃太の刀が光っている。

最終話『光と闇』（前書き）

桃太伝の続編ですので、桃太伝を見てないと内容がわからないと思われる。

できれば、桃太伝をお読みになってからこちらを読んでください。

あらすじ

桃太郎の子孫である桃太が仲間とともに悪の軍団、鬼王軍を倒してから数ヶ月後…

最終話『光と闇』

「！」

桃太は消えた。桃太は光の力を使うことでパワーアップし、スピードも上がったことで消えたように見えた。

桃太は攻撃しては移動し、それを繰り返す。そして、一撃、影虎の肩に当たった。

桃太は一旦距離を取る。

影虎は肩に手をやり、首を傾け、首を鳴らし普通に立っている。と、

「！」

桃太の足もとから黒い刀が出てきた。桃太は足を刺され、キズを負った。ふと、影虎の刀を見る刃の部分がない。どうやら刃だけ移動するようだ。

すると、また刀が出てきた。桃太ジャンプして避ける。

それが何回も続くと、その刀は自分の影から出ていることに気づく。

「気づいたか。この技は影から攻撃できるのだ。だからいくら逃げても影がある限り逃げ場はないぞ」

「くそ。このままじゃ…！」

桃太はあることに気づくと、

「ハアアアア」

逃げながらも気合い入れる。桃太は全身光りだした。そうしたら強い光で影が無くなる。

「これで影の技も使えまい」

桃太は勝ち誇ったように言うと、光の斬撃を飛ばした。影虎は刀を前に出すとその斬撃を吸収する。

「！」

「俺の技を破って勝ったつもりになっていたか。残念だったな」

桃太は光の斬撃を何度も飛ばした。しかし、全部吸収される。

「無駄だ。闇属性の力は全てを飲み込む」

「なら…」

桃太は接近戦を挑む。二人はつばぜり合いをするが、桃太は光を失っていく。影虎の刀が吸っているのだ。

「どうした」

影虎が攻撃する。桃太は足を怪我しているため防戦一方だ。

「うっ」

影虎は怪我をしている桃太の足を踏む。

「あ、ああああ」

影虎は踏んだ足をぐりぐりと押しつけると、突きをしてきた。
桃太はなんとか体をひねり逃げた。

「活人剣奥義 『破壊撃』」

桃太は刀に光の力を入れ攻撃するが刀で受けた影虎にまた光を奪われる。

次に影虎が刀を振り下ろす。桃太は刀を横にし、両手で防ぐと、

「！」

影虎の刀にヒビが入っていた。

（これはさっきの攻撃で）

桃太はあることを考え、実行した。

「ハアアアアア」

「懲りないやつだ」

桃太は全ての力を刀に集中させた。

影虎も次の攻撃は覚悟を決めた渾身の一撃だろうということに気づき、

自分も本気になった。

「ならば俺も最大の力で答えよう。ハアアアア」

影虎も全ての力を刀に集中させた。その刀は闇のエネルギーをまといい

揺らめいている。

「いくぞ！」

「来い！」

お互い飛びかかった。刀どうしがぶつかる。

「うおおおおお」

桃太の刀はどんどん光を増して、

「！」

影虎の刀が折れ、桃太の一撃が影虎に当たった。

「ぐおおおおお」

影虎は倒れ、気を失った。

「はあ、はあ」

桃太は疲れ切って、立ってるのもやっとだ。

「勝負あり、勝者 桃太」

村長が言つと、桃太は倒れた。激しい戦いに疲れ、眠ってしまったのだ。

3日後。目が覚めた桃太。

「目が覚めたでござるか」

そこには新之助をはじめ、みんながいた。どうやらみんな無事のようだ。

「新之助さんは、大丈夫なんですか？」

「大丈夫でござるよ」

新之助は村人の木属性による治癒能力によってすごい回復をしていた。

「ところで、あのあとどうなりましたか」

「わしが話そう」

村長が言つ。

「あのあと、すぐに影虎は目を覚まし、「約束は守る」と言って、仲間を連れ自分たちのつくった村に帰って行った。もう心配することはないじゃろ」

こうして鬼が島による戦いは終わった。

桃太伝 鬼が島編 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4124p/>

桃太伝 鬼が島編

2011年10月5日07時55分発行